

擦文文化の農耕 —北大構内サクシュコトニ川遺跡での研究—

考古学の研究対象は、かつての人たちが作り、使っていた道具類、たとえば土器や石器、鉄器、あるいは住んでいた家や遺骸が葬られた墓だけにとどまらず、ゴミ捨て場から見つかる動物の骨や植物の種子にまで及びます。このような食べ残しは、当時の人々が、何を、どれくらい、どのように調理して食べていたのかを知るうえで、たいへん貴重な資料です。こうした資料を対象とする研究は、動物考古学あるいは植物考古学とよばれ、ここ20～30年のあいだで目覚ましい発展をとげてきました。

7～12世紀頃に北海道に展開した擦文文化に関しても、動物考古学や植物考古学の観点から、これまで多くの成果があげられています。そうした研究の契機となったのは、昭和56～57(1981～1982)年に実施された、北大キャンパス内のサクシュコトニ川遺跡(K39遺跡恵迪寮地点)の発掘調査によってでした。

*

サクシュコトニ川遺跡は、擦文文化の中頃に形成された集落址で、^{しゅうらくし} 堅穴住居址が5基見つかっています。^{たてあな} 堅穴住居址内のカマド周辺や住居址外の数箇所からは、数ミリ前後の大きさの炭が集中している場所が確認されました。そうした場所の土のなかには、水洗浮遊選別法(写真)という方法で丹念に調べてみると、1～2mm程度の大きさの植物種子が含まれていたのです。

遺跡から検出された種子はいずれも炭化していました。そのため幸いにも腐食せず、遺存したと考えられます。カマド周辺からこうした炭化種子が数多く確認されるのは、調理の過程で種子がカマド内に落ちこみ、被熱したということなのでしょう。顕微鏡でその形態を観察してみた結果、これらの種子は、コムギ、オオムギ、ヒエ、アワ、キビなどの穀類であることが判明しました。

*

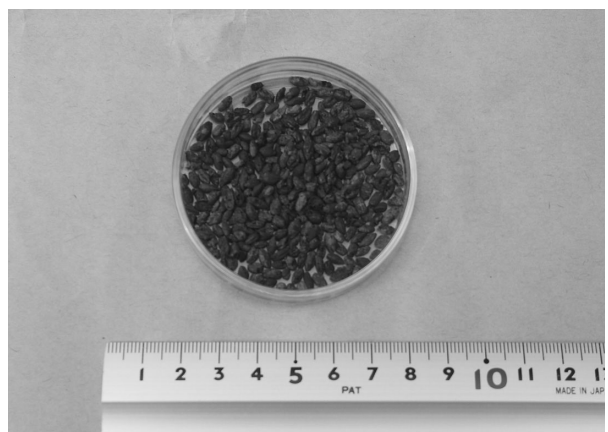
このサクシュコトニ川遺跡での発掘以降、擦文文化における穀物種子の研究が、本格的に開始されました。道内各地の遺跡発掘でも、同様

の調査方法が取り入れられ、擦文文化の集落遺跡から穀物の炭化種子が出土するのは、ごく一般的であることがわかってきたのです。

こうした穀物種子は、さまざまな遺跡から多量に出土しているため、道内各地で栽培されていた可能性が高いと思われます。擦文文化では、狩猟や漁労だけでなく、農耕によっても食料を得ていたことがわかったのです。この調査成果は、河川や海での漁労活動だけが強調される傾向が強かった、それまでの擦文文化のイメージを塗り替えることに結びつきました。



遺跡から回収した土を水に入れると、乾燥した炭化物は、水より比重が軽いので浮遊する。そのうわづみをアミで濾過し、微細な種子の有無を確認する。



サクシュコトニ川遺跡から出土した炭化したオオムギ

(埋蔵文化財調査室)